旧約聖書の大切さ

2023/8/20

牧師はこれまで、機会あるごとに、律法と呼ばれる旧約聖書は、イスラエル民族に限って与えられた特殊命令であって、異邦人である私たちは、旧約聖書の律法を守る必要はないと、語り続けてきました。

聞き方によっては、牧師はあたかも旧約聖書を軽視し、あるいは無視しているようです。しかしそうではありません。旧約聖書は非常に大切な書物です。

いままで牧師は、「旧約聖書すなわち律法は」と言う言い方をしてきました。それは新約聖書も用いている言い方で、イスラエル人たちが一般的に用いている呼び方です。でも、旧約聖書全体をすべてひっくるめて律法と呼ぶのは、少々曖昧で、正確な呼び方ではありません。イスラエルの人々は、旧約聖書全体を律法と呼ぶ一方、旧約聖書を四つの文書に分けて、もっと正確な呼び方もしていたからです。

それは、① 律法であり、モーセの律法ともよばれ、旧約聖書の最初の五つの書物を指していました。② 次は、歴史と呼ばれる部分で、ヨシュア記からルツ記に及ぶ部分で、主にイスラエルの歴史について記録された部分です。 ③ それに続くのが詩歌と名付けられた部分で、詩編から始まり雅歌に至ります。これは主に、イスラエル民族が自分たちの信仰を歌った歌の、歌詞だけが伝えられたものです。また詩歌とは少し趣を異にしますが、知恵文学と呼ばれる諺をまとめた箴言や伝道の書が含まれます。 ④ 最後はイザヤ書からマラキ書に至る予言書と呼ばれる部分です。これは文字通り、預言者たちの言葉が書き残されたものであり、大預言書と小預言書に分けられています。イスラエル国家についての預言が大部分ですが、当然、歴史も含まれています。しかし何と言っても、救い主についての預言が非常に重要なものです。

旧約聖書が大きくひとまとめにされて、律法と呼ばれる時には、旧約聖書の律法的性質が強調されているのは、言うまでもありませんが、旧約聖書は律法以外にも、非常否大切な情報が含まれていて、現代のクリスチャンにとっては言うまでもないことですが、すべての人間にとって、なくてはならない書物なのです。そういう意味で旧約聖書は、人類に対する神様からの手紙とさえ言えるものです。

ところが大切な点は、旧約聖書の律法はイスラエル民族に限って与えられた法律であって、異邦人には与えられていないということです。牧師が問題として取りあげてきたことは、教会がそのイスラエルだけに与えられている部分を、あたかもすべての異邦人にも与えられたものであるかのように、教えてきた間違いに関してです。

モーセの律法と呼ばれる、旧約聖書の最初の五つの書物の中で、私たちがしっかりと読み、理解し、記憶しておかなければならない特異な個所は、出エジプト記の第20章1節です。そこには、律法の中でも最重要とされた基本的な戒め、十戒が誰に対して与えられたのかが、明確に記されています。また、どういう状況で与えられたのかも、なぜ与えられたのかも記されています。そしてこの理由付けは単に十戒だけに限られたものではなく、それに続くあらゆる細かい法律にも、当てはめられるものであることにを、知らなければなりません。

出エジプト記20章の初めには、これに続く律法は、イスラエル民族に限って与えられていること、それ

は神様がエジプトの奴隷の家から彼らを救い出し、助け出した特別な民族なのだから、これからはこれらの律法に従って、神様によって選ばれ救い出され、特別な使命を与えられた民族として、それにふさわしい生活をしなさいと言うものだったのです。

牧師が口を極めて言うのは、このイスラエル民族に限って与えられた律法を、日本人を始めとする異邦人に直接適用して、この律法に外れているから、それを守っていないから、日本人は罪人だなどと言ってはいけないということなのです。

また、イスラエルの歴史には、神様がイスラエルを選んで大切な使命をお与えになっただけでなく、その使命を遂行するために、様々な指導と教育と干渉をもって、イスラエルをお取り扱いになりました。その記録を用いて、それがあたかもすべての民族に対する、神様のお取り扱いであるかのように説教したり、教えたりしてはならないということです。イスラエル民族に与えられた神様の祝福や懲罰を、私たち異邦人が期待したり、恐れたりしてはならないし、その記録を自分たちの行動の規範や模範にしてもならないということです。

たとえば、イスラエル民族が繰り返した異民族との戦争の例を取りあげ、私たちも神の名によって戦争を始め、近隣の民族や国家を侵略支配しても構わないなどと、教えてはならないのです。つい最近まで、西欧キリスト教諸国はそのように考え、教え、世界中を侵略し、植民地を造り、平気で奴隷政策を続け、非人道的なことを繰り返し、人間に与えられた神様に似せて造られた姿、人間としての基本的生き方に違反してきたのです。

さらに、旧約時代に生きていたイスラエルの偉大な人たちの考え方や行動、あるいは彼らの信仰の表現である詩編などを取りあげて、現代の私たちの信仰の模範や基準にしてもいけません。ちなみに詩編などを読むと、その大部分が復讐を願い、敵をやっつけてくださいと言う願いの表現です。神様を信頼する信仰は素晴らしいのですが、敵を憎んで復讐を願うのは、新約聖書にまとめられているイエス様の行動と教えには、正反対の心情です。イエス様は敵を愛し、迫害する者のために祈れと、徹底してお教えになっています。使徒パウロも、そのような復讐の精神を厳しく戒めています。神様のみ教えがまだ十分に教えられていなかった、旧約時代の人々の信仰をそのまま真似てはいけないのです。

またすでに述べたように、旧約聖書は、大きく分けると四つの分野に分類できますが、必ずしもその境目が明らかなわけではありません。モーセの律法に含まれる書物の最初は、創世記と言う書物で、これは律法が与えられる前の人類の歴史であり、イスラエル民族が、神の救いのために用いられる、いわば救いの器として選ばれた歴史が語られているものです。

そこで語られているのはイスラエルの歴史の始まりではなく、なぜイスラエルが選ばれ立てられ用いられなければならなかったのかという、理由が歴史として残されているのです。

さらに遡ると、創世記には神様の天地創造の物語が記されています。多くのまじめなクリスチャンたちが、創世記第１章に記されている記録を、間違いのない記録と考え、そこに記されていることは歴史的にも、科学的にも事実だと思い込んで、現代の科学と戦いを繰り広げてきました。それは聖書が真実の書であり、間違いのない書物であるという、大前提に立って考えるからです。確かに聖書は真実の書であり、間違いのない書物です。しかし、真実の書と呼ばれている意味が異なっているのです。

現代人が真実と考えることと、創世記が記された3千数百年も昔の人が真実と考えることとは、違っている。異なっているのです。間違いがないという意味も、当然異なっています。ましてや、創世記にはイスラエル民族独特の、ものの考え方や、記述の仕方などがあって、私たち現代人とは、全く異なっている部分が多いのです。私たちは現代の私たちの感覚からの判断を、3千年以上も昔に記録された、異民族の記録に押し付けてはならないのです。当時のイスラエル人の物事の考え方や、記事の書き方、記録の仕方から考えて、真実の書であり誤りのない書物なのです。

ですから、創世記の天地創造の物語は科学的事実を記したものではなく、人間と神との関りにとって極めて大切なこと、「真実」について記したものであると考えるべきです。「科学的事実」かどうかは、当時の人々の関心事でも、必要事項でもありませんでした。天地創造の物語は、人間と神との関係を明らかにするために、便宜上、持ち出されたに過ぎないのです。しかもそれらすべてが、現代でいう科学的事実かどうかの問題ではなく、当時の人々の常識を背景に語られているのです。とは言え、神様は天地の創造者であるという、基本的教えは事実なのです。

端的に言うと、神様の天地創造の物語は、どのようにして天地が創造されたかという問題を語ろうとしたものではなく、あなた方が神として信頼している私は、多くの民族が神々として拝んでいる神とはまったく次元の違う、絶対の存在、無限の存在、全知全能の存在であると教え、私との正しい関係を保ちなさいと勧めているものです。これは天地創造の物語を用いた、神様の自己紹介なのです。

またその神様の自己紹介の中で、神様と人間の関係の最も大切な部分が教えられています。それは人間が神様によって造られ、その存在はまったく神様に依存していることが、明らかにされています。それだけではなく、人間が神の御姿に似せて造られた事実が語られ、人間の真の姿が描き出されています。

人間は神様に似た性質を持つものです。その第一は、霊的な存在であることです、人間は単なる動物ではなく、霊的な世界を感知し、察知できるものであり、霊的な感覚を持って生きるものです。だからこそ人間は、ほかのすべての動物たちとは異なって、目に見えないお方、手で触れることもできないお方である、神様を感じることが出来るのです。人間は神と同じに造られていませんから、無限に大きく気高い神様を、理解しきることはできません。神様の実態を把握することは不可能なのです。神様を理屈で説明することもできません。しかし人間は、神様を感じることが出来、神様を礼拝し、敬い、賛美し、感謝しながら生きることが出来るのです。幼子が自分の親について説明はできませんが、親の存在を感じ、親に甘え、安心して生きることが出来るのです。そしてそのように生きるのが、人間の大切な使命なのです。神様が人間をご自分の姿に似せてお造りになったのは、人間が神様を礼拝し、神様と交わるり、神様の愛を満喫して生きることが出来るためなのです。

さらに人間か神様に似せて造られているという事実は、人間と人間がどのように生きていくべきかと言うことが、本能によって教えられるようになっているのです。旧約聖書の律法の様に、文字で書かれ　た律法ではなく、心に記された律法なのです。神様に似た、愛、優しさ、寛容さ、哀れみ、公平、正義など、神様のあらゆる性質が、本能的に現れれて、人間社会を美しく作りあげることが出来るように、されているのです。

ですから人間が罪を犯し、人間の性質、その本能に異常をきたしてしまったとは言え、まだまだその創

造の時の本源的性質、本能は、完全に失われてしまったのでも、壊れてしまったのでもありません。まだまだ。すべての人間の中に、造られた時の姿が残っているのです。中でも、日本人の間には、神に似せて造られた本源的性質は、かなり色濃く残って、日本人の精神構造となり、日本社会の基盤となっています。

日本人の中に特に色濃く残っている理由は、聖書で見る限り、日本には偶像礼拝が少ないということに関係すると思われます。日本人の神観、神意識、礼拝観は、聖書の教えに非常に近いのです。誤解をまねきそうですから、もう少し説明します。日本人の精神は、神道の精神です。神道のかなり高尚な部分、純粋な部分です。神を認識しながら、目で見ることも手で触れることも、言葉で説明することもできない高貴な方として、神についての説明も、教えも神学もないままに、ただ崇め、礼拝し、感謝をささげるのです。本来、お願い事をするなど、もってのほかなのです。それは俗化した神道感覚なのです。

ほとんどの人間には同様な感覚が残っています。それが、より良い人間関係、社会の形成の基盤になっています。しかし、日本人ほど強烈な感覚を持っている民族は少ないと思います。それが日本社会の構成の土台となっているために、日本は瀬かい中で最も美しい社会となっているのです。それは西欧キリスト教諸国が背伸びしても及ばないものです。日本人は、常に目に見えないお方、気高く清く正しいお方が、自分たちをご覧になっておられると感じながら、生きて来たのです。

西欧キリスト教社会は、聖書の教えを誤解しています。ですから、キリスト教を名乗りながら、とんでもない社会を造り、とんでもなく醜い歴史を刻んできたのです。日本社会には、キリスト教徒がほとんどいません。しかし、日本社会ほど聖書の教えに近い社会はないのです。多くの日本人は、自分では説明が出来ませんが、キリストの生き方と教えが大好きです。しかし、キリスト教には違和感を抱いています。教会で教えていることが、なにか、キリストのお教えになった教えとは違うと感じ、失望し、教会を離れています。その主な理由は、旧約聖書への誤解です。異邦人でありながら、教会が旧約聖書の律法を自分たちに直接適用し、何の考察もなしに、日本人を旧約聖書の律法で裁いているからです。

旧約聖書は非常に大切な、重要な書物です。人間の生きるべき姿、在り方が記されています。さらに罪を犯した人間を救おうとなさる、神様の御計画と、その遂行、そのためのイスラエル民族の選出と、任務の賦与が記されています。それらを正しく理解して読むことが、クリスチャン信仰に取って重要なのです。